

私は中学生の頃から地域青少年ボランティアに参加している。高校生になり、より多くの地域ボランティアに参加したいと考えていた。そんな時、このプロジェクトと「松がつなぐあした」という本を知った。

震災前の防災林について震災当時4歳だった私には記憶があまり残っていなかったが、父の実家が東松島市の野蒜にあったため、父は写真を見せながら「野蒜の海沿いには松林があったんだよ。」と震災前に住んでいた頃の話をしてくれる。そのため頭の中でなんとなく海の近くにマツがあるのは当たり前なのだろうと思い、なんの疑問もなくこの本を読み始めた。だが、読み進めると「マツが防災につながるのだろうか」「常緑広葉樹が良いのではないか」などの意見が出たことを知り、「確かになぜクロマツを植えるのだろうか」という疑問が浮かんだ。

また、1つの大きなプロジェクトになるには一人ひとりの思いや出会いが重なってできているのだということに驚嘆した。このプロジェクトも、マツを植えることを思いついた発案者の吉田さん、「やろう。」と声をあげた大友さん、プロジェクトの中心になった佐々木さん、一緒に活動している地区内外の方々などが関わり、支え合ってきたことで行うことができている。誰かが声をあげなければこのプロジェクトはなかったかもしれない。2011年3月11日に起きた出来事は多くの人の大切なものを奪い、多くの人の生活を変えてしまった。松林は昔からの地域の人たちの生活の一部であり、松葉さらいやプロレスなどの思い出を本の中で読んだ時、父や祖父母が住んでいた時もこのような文化があったのかなと想像した。そうしたいつもあったはずの当たり前がなくなるということとはとても辛く残酷なのだと改めて感じた。

なぜマツなのか。マツは厳しい海辺の環境に耐え、早く育ち冬でも葉が枯れない上にコストも安い。故に昔から松林が海岸に植えてあったのだと納得がいった。本の中で中村さんが松林への期待が過剰であったことを反省しつつ「それまでの営々と海辺の生活を守り続けてきた海岸林恩恵を忘れ去ってしまうのは冷淡ではないか」という考えが一番共感できた。

本を読み終え、マツは万能ではないがクロマツに勝る選択肢はないのではないかと感じた。マツは植えたら終わりではなくマツを育てる人、見守る人が必要で、それには長い年月がかかる。だからこそ私たち若者がプロジェクトに積極的に参加し次世代へ繋げていく必要があると思った。私もプロジェクトに参加することで、海辺の生活を守る松林を育てることに関わっていきたい。